

# イスラムとの対話

## 第3回 東南アジアとイスラム



1997年11月19日（水）

於：ホテルオーク

主催：笹川平和財団





---

---

## 目次

田淵節也・笹川平和財団会長挨拶 .....	1
<b>第1部 中村教授の講演 .....</b>	<b>2</b>
はじめに .....	2
知られざる東南アジア・イスラム .....	2
私とイスラムとの出逢い .....	3
東南アジア・イスラムの一般的イメージ .....	4
観光スポットからは見えない生きている宗教 .....	5
生活体制の中に存在するイスラム .....	6
イスラムの社会規範であるイスラム法 .....	7
地方文化へ浸透するイスラム .....	7
植民地からスタートした近代とイスラム .....	8
近代主義に対するイスラムの2つの対応 .....	8
イスラムが支えたインドネシアの独立 .....	9
イスラムの主流化と新たな指導者像 .....	10
<b>第2部 質疑応答 .....</b>	<b>12</b>
<b>付録（中村教授講演レジメ） .....</b>	<b>17</b>

**講師：中村光男 (なかむらみつお) 教授**  
**プロフィール**

1933年生まれ  
東京大学文学部哲学科卒業、コーネル大学大学院Ph.D.  
専攻は文化人類学、宗教人類学、東南アジア地域研究ほか  
現在、千葉大学文学部文化人類学研究室教授

**モデレーター：池田明史 (いけだ あきふみ)**  
**助教授プロフィール**

1955年生まれ  
東北大学法学部卒業  
アジア経済研究所、イギリス・イスラエル留学を経て、  
現在、東洋英和女学院大学社会学部助教授

## 田淵節也・笹川平和財団会長挨拶

本日はご多忙中、朝早くにもかかわらず、当朝食会においでいただきありがとうございます。  
ます。

さて、このイスラム朝食会は、お陰様で第3回を迎えることができました。第4回で終了する予定の3回目でございます。

昨日のルクソールでの事件は、観光客が死亡したものではありませんかと思えます。あのような大事件が起こって、よくは分かりませんが、イスラム原理主義者のしわざではないかと言われております。これでまた、イスラムの本が売れ出すのではないかと  
思います。

この会議の全体の目的は、西側の脅威としての「イスラム原理主義」論や、西側の価値観とは相いれないイスラム世界と西洋間の「文明の衝突」論の出現などに鑑み、イスラム理解の一助として、基本的な知識、西側の価値観とイスラム世界の同質的な発想や共通点の解明などを目指しております。

4回シリーズのうち、第1回は、イスラムについての概論、第2回は紛争とイスラムについて話をお聞きいたしました。今回は私たちにとっていちばん身近な「東南アジアとイスラム」について学んでいこうと考えております。

イスラムはどのように政治的・経済的・文化的に影響をおよぼしているのか。インドネシア・マレーシア、フィリピン、タイ等の例をとりあげて考えます。また東南アジアのイスラムが持つ近代国家との関り、国民国家の形成、社会の調和について考えます。

なお、第3回の本日は、講師に千葉大学文学部教授の中村光男先生、モデレーターは、おなじみの東洋英和女学院大学社会科学部助教授の池田明史先生にお願いしております。それでは、よろしく願いいたします。

## 第1部 中村教授の講演

### はじめに

池田 おはようございます。この朝食会も3回目になったわけですが、前回の朝食会のテーマは「紛争とイスラム」でした。こういったことをタイミングがいいと言ってよいのかどうかと思うのですが…、ご承知のように、先頃エジプトのルクソールでイスラム絡みのショッキングな事件が起きました。また、これは直接イスラムには触れていないわけですが、あのようにペルシャ湾でイラク絡みの非常に問題な状況が起り、「イスラムは問題だ」という側面が端的に出てきているような時点で、この3回目の会合を持つわけです。ここで我々が問い直さなければならないのは、たしかに「問題だ」と思われる状況が出てきているのは間違いなのですが、しかし、それだけがイスラムなのか。イスラムとはそういう側面しかないのか、という点だろうと思います。今回はその意味では非常にタイミングのいいテーマでお話をうかがうことができると思います。

全世界のイスラム人口が約10億と言われている中で、アラブ人の占める数がだいたい2億、5分の1くらいです。そして、それと同じくらいの人口を東南アジアという地域が持っています。中東のイスラムとアジアのイスラムを比べてみた場合に、中東の中に占めるアラブの位置とアジアイスラムにおける東南アジアの位置というのは、だいたい同じような位置だと思われれます。中東の中ではアラブのほかにトルコ、イランなど、アラブでないイスラムの国が控えているわけです。同じように東南アジアの周囲にも南アジアのイスラム、中国のイスラムという形で、おもしろい構造のアナロジーができています。中東のイスラムというのは今申しましたように、非常に騒々しい、喧しい状況が目につくのに対して、アジアのイスラムは、若干の例外があるにせよ、一般的に

非常におとなしい印象を我々に与えるわけです。その違いはどこから来ているのか。このことを今日のお話を基に考えたいと思います。

お話をさせていただく中村先生は、プロフィールが配られていますのでこれを参照していただければよろしいかと思いますが、一点付け加えさせていただきますと、60年代の学生運動で勇名を馳せた先生であり、その先生の目から静かなおとなしいイスラムというのがどのように映るのか、それをお聞きするのを楽しみにしております。それではよろしく申し上げます。

### 知られざる東南アジア・イスラム

中村 おはようございます。中村でございます。先ほど会長からお話がありましたように、東南アジアは私どもの隣の地域で、おそらく皆さま全員がこれまで一度ならず数度現地を訪問され、現地でお仕事をされたり親しいお友達がいらっしゃるという状況にあるのではないかと思います。そういう点で東南アジアは日本、あるいは日本人にとって大変身近なところですが、率直に申しまして東南アジア・イスラムということになると、意外に知られていないことが多いように思います。知られていない理由のひとつには、イスラムの存在、イスラム教徒の存在が、ニュースのヘッドラインになるような格好では出て来ないことがあるでしょう。先日、エジプトで血なまぐさい事件が起ったばかりですが、東南アジアではテロ、あるいは過激派だとかいった格好でイスラムが出てくるものがほとんどありません。絶対ないとは申しませんが、それが日本や世界のジャーナリズムを震撼させるというような状況ではありません。それは私の観察によりますと、同じイスラムといいながら、東南アジアにおいてはイスラムの側、特に指導者の側から意識的な努力がなされているから

だと思えます。

ご存じの方もいらっしゃるかと思いますが、1980年代のインドネシアのイスラムの思想家であり、インドネシアの社会評論の雑誌「プリスマー」の元編集長であったアスワブ・マハラシさんが、インドネシア、東南アジアのイスラム全体を特徴付けて言った言葉があります。それは、「open minded」——心の開いている状態、「contextual」——社会状況に応じる、「forward looking」——未来・将来を見つめる、「innovative」——革新的、そして「accommodative」、調和的。おそらくこれは東南アジアのイスラムの特徴をよく示していると思えます。どうしてこのような方向をとっているのか、また本当にこんな格好で東南アジアのイスラムが進んでいるのかということ、これからお話をさせていただきたいと思えます。

## 私とイスラムとの出逢い

私は東南アジアのイスラムを専門領域としており、主に文化人類学の立場からアプローチしています。しかし、最初からそれを専門としようとしたではありません。そもそも私はキリスト少年でした。父親がキリスト教の牧師になったほどの熱心なキリスト教信者だったものですから、私も非常に敬虔なキリスト教信者でした。また、先ほどご紹介にもありましたが、学生時代はごちごちのマルクス主義者でした。ということで、いずれにせよイスラムについては全く知りませんでした。

東南アジアの勉強をするためにアメリカの大学院に入り、研究を始めたのですが、その時もイスラムは頭のほんのかたすみにあるかないかという状況でした。その後、インドネシアに現地調査に行きました。当初の現地調査のテーマは「地方都市の社会史の研究」であり、まだイスラムのイの字も出てはおりませんでした。ところが現地地で生活をしている間に、インドネシアの88%の人がイスラム教徒で、大半の人々の間にいわば生活の

枠組みとして、あるいはメンタリティの基本的なベースとしてイスラムが大きな力を持っているということを実体験で感じ始めました。それから、だんだんと“生きているイスラム”に惹かれるようになったのです。

いくつかきっかけがありますが、その“生きているイスラム”にいちばん最初に触れたのは、現地の大学の学生でした。当時私の身分は大学院の学生でしたが、アメリカの奨学金をもらっていたので、現地の大学生に私の助手の仕事をお願いしたのです。彼は10代の普通の大学生だったのですが、仕事をしていても、時間が来ると熱心に毎日の礼拝をするわけです。それは、決まった型とする形式的な礼拝なのですが、私が借りていました商家の車庫の一角に新聞紙を敷いて、西の方に向かってちゃんと礼拝をしておりました。その時私が最も強い印象を受けたのが、礼拝を終えて仕事に戻ってきた時の彼の顔つきです。その顔つきに何とというか、「神に直面した」、「神と対面した後の清々しさ」、そんなものが残っているわけです。それに非常に惹かれました。

私は家族と共に小さな田舎町に居を構えて調査をしていました。中部ジャワ、ジョクジャカルタという王都の郊外、南東6kmの方のコタクデという町です。いまのジョクジャカルタの王家の祖先であるマタラム王国の王朝が始まった地域です。そこにローカルなイスラムの指導者がいました。私が1970年にお会いした時にはもう随分のお年でしたが、まだ矍鑠としてご自分の経験を私に教えてくださいました。特に日本占領時代には、自分が日本側にいかに協力して活躍したかというようなお話をされていました。彼は、ローカルな指導者であり、みんなの相談役として町の人たちが持ち込んでくるいろいろな問題の相談にのっていたのです。ところが、そのおじいさんが突然亡くなってしまいました。私は彼とインタビューの約束をしていまして、その日の朝うががったのですが、家人の方が出ていらして「実は昨夜亡くなっ

た」と言われました。その家人は娘婿だったので、その方の私に対する対応の仕方がまた非常に印象的だったのです。「おじいさんの時が参りました」と言うのです。「ワクトウニヤ・ダタン」、彼の持ち時間が来た、それで神のもとに召されました、と非常に淡々と静かな笑みさえ浮かべて語るのです。自分の義理の親にあたり、その地域では非常に尊敬されたイスラムの指導者が亡くなったということに対する対応が、心穏やかというか人の運命を神にゆだねるといふか、それが日常生活にそのまま出ているのを感じました。これも私がイスラムに惹かれたひとつの大きなきっかけでした。

研究者の中には、いろいろな経緯でイスラムの研究を始める方がいらっしゃいますが、私の場合はこのように生きている人間、現実のイスラム教徒の生活に触れたことがきっかけとなっています。実際に町のイスラム教徒たちが「誰にどうこうせよ」と言われるわけでもなく、自主的にお金を集めて学校を作ったり、あるいは診療所を立てたり……、いまの言葉でいうと、「ボランティア・アソシエーション」、「ボランティア・アクティビティ」というボランティアのワークを昔からやっているわけです。カッコいいからとか、ファッションだからとかいうのではなく、自分の信仰の一部として、自分の精神生活の一部として、あるいはそれがイスラム教徒として当たり前のことなんだからと、実に淡々とやっています。私はその姿に触れて、東南アジアの一角でも社会の基礎、核の部分をイスラムが支えていることを身近に見てとったわけです。それが私のイスラム開眼といえますか、イスラムに対して学問的にも、またひとつの生き方の問題としても興味を持ったきっかけです。ということで、非常にイスラムに惹かれているわけですが、私はイスラム教徒ではありません。宗教的にはまだまだキリスト教のしっぽを残しています。

そんなわけで、最初は研究テーマとしてその町

の社会史、ソーシャル・ヒストリーということを考えてのですが、いくつかのきっかけからだんだんと人の生活、その町におけるイスラムに興味を惹かれるようになりまして、研究テーマもこの町におけるイスラムの役割にひっくり返ったのです。調査に基づいて書いた博士論文は、「THE CRESCENT ARISES OVER THE BANYAN TREE: A STUDY OF THE MUHAMMADIYAH MOVEMENT IN A CENTRAL JAVANESE TOWN」というものです。インドネシアの Gadjah Mada University Press というところから出版してもらい、こんな形で研究成果がまとまるまでになりました。

## 東南アジア・イスラムの一般的イメージ

最初にも申しましたが、東南アジアのイスラムは近代ときちんとつきあう、イスラムと近代を両立させるということを経済的な努力の末に実行している点の特徴だろうと思います。それと同時にいまの段階では、私たち日本を含めて近代社会が直面しているさまざまな問題、特に精神的な面での間隙、穴を埋めるものという方向性も示しているのではないのでしょうか。

私自身は1970年代から自分の研究を通じて、東南アジアのイスラムについてこのように思い始めたのですが、学界ではまだまだそうではありません。特にヨーロッパ、アメリカの学者が主導権を握った東南アジア研究の中では、「東南アジアのイスラムはいいかげんなものだ。表面だけで、イスラム教徒といっても名目的であって、信仰内容も折衷的な、土着な信仰と混ざり合ったようなもの」といったイメージが支配的でした。そのイメージをいろんな形で正当化する理論も横行しています。いちばん俗耳に入りやすい理論としては、「イスラムは砂漠で生まれた宗教で、砂漠の遊牧民の質素で純粋なところから生まれたものである。これがアラビアからインド洋を渡って東南アジアに入ると、高温多雨湿潤の熱帯の中で変質し

てふにやふにやになり、砂漠の厳しい宗教が折衷的な神秘教的なものになった」という議論です。この議論はひと世代前までは学説として主流でした。このように学界の中でも、東南アジアのイスラムは中東の本場のイスラムに比べて、二番煎じ、三番煎じで田舎イスラムのため大したことはない、というイメージが随分長いこと続いていました。

ところが、私はそれに対して現地の体験から「どうも違うようだ」と言ってきました。ようやく欧米の研究者からも私のような考え方をする研究者も出てきて、話が少しずつは通じるようになってきた、というのが最近の学界の実状です。学界自体の認識が変わってきたのは、1980～90年前半までの東南アジアの国づくり・社会開発の成功が非常に大きいと思います。マレーシア、インドネシアをはじめ、それぞれの国が高い経済成長率を維持し、国民所得が増加しています。目に見えて国民生活が豊かになり、クアラルンプール、ジャカルタをはじめ、都市の近代化もどんどん進行しています。しかも、このマレーシア、インドネシアが非常に多くのイスラム教徒を抱えており、政府、社会の指導者にも多数のイスラム教徒がいるという状況の中で、「東南アジアのイスラムも真剣に考慮するに値するのではないか」という、学者、研究者のパースペクティブ（視覚）の変換がこの10年くらいで起こっていると言ってもいいかもしれません。それと同時に東南アジア諸国自身の教育の発達、特に高等教育が発達する中で、欧米や日本の知識人・学者たちと対等に話のできる研究者、学者が生まれてきています。さらに、イスラム教徒としての自己認識、自己主張を明確に打ち出すようになってきたという展開もあります。そんなこともあり、東南アジアのイスラムのイメージは、最初に申しましたような特徴付けの方向が現実的である、という認識がだんだんと強まっているように思います。そのようなパースペクティブの転換によって、もう一度東南アジアのイスラムを振り返るといいう作業も進んでお

り、東南アジアのイスラムの歴史の深さ、その及んでいる範囲の広さ、という点で改めて認識を強くしているという次第です。

### 観光スポットからは見えない生きている宗教

インドネシアというと、観光のスポットとしてはジャワで仏教寺院のあとだったボロブドゥール、あるいはヒンズー教の遺跡であるプランバナなどがあげられ、そのイメージから、イスラム以前のヒンズーや仏教がまだまだドミナントであるという印象を持たれることが多いようです。しかしこれは、インドネシア政府が観光のために外に売っているイメージで、現実の生活ではこのふたつの遺跡とも宗教生活に使われているわけではありません。これは、熱帯のジャングルに覆われていた遺跡をオランダ時代から掘り起こして、最初は考古学的な研究の対象として、その後はインドネシア政府によって観光の資源として活用されたもので、現実の生きている人々の宗教生活とは関係ありません。実際にはインドネシアの場合は88%の人がイスラム教徒で、生きている宗教としてはイスラムが主流なわけです。よくあるエピソードとして、日本人観光客がインドネシアにやってくる、朝早く明け方の静寂をぬって、「アラー・アクバル」という朝の礼拝の音がスピーカーから降りそそぐという状況に遭遇する。そこで、「インドネシアはイスラムだったのか」と初めて気がつくということがあります。この「アラー・アクバル」という叫びは「アラーは偉大なり」という、イスラム教徒として神への帰依をひとりで表現する言葉ですが、これは本当にイスラム教徒に染みついているといつてよろしいのでしょうか。

実は私はこのことに関して改めて目を開かされる事実遭遇しました。去る9月26日のことでした。スマトラ島のメダンの飛行場近くで、ガルーダインドネシア航空の飛行機が墜落し、乗員乗客全員が死亡するという非常に大きな飛行機事故が



ありました。その事故原因の究明が行われたのですが、遠因として大きかったのは煙霧のようです。スマトラ、カリマンタンのふたつの島で野焼きを行った火が消えなくなってしまう、大変な煙害をもたらし、視界が不良になった。それが事故の遠因だったようです。現在はブラックボックスも回収され、さらに原因が解明されて、結局は管制塔の誘導ミスが直接の原因と分かりました。これは現地の新聞には出ていましたが、日本ではまだ報道されていません。それで、私が何に改めて感銘を受けたかと申しますと、パイロットと地上の管制塔の交信記録が解析され、新聞に掲載されたその内容です。それによると、操縦士が最後に叫んだ言葉が、「アラー・アクバル」だったのです。雲から出て視界が500メートルあるかないかくらいの状態だったそうです。突然密林が現れて衝突するという最後の瞬間の言葉が「アラー・アクバル」でした。イスラム教徒は死ぬ前に神を讃えて、神の恩寵にすがって天国に召されることを願えるように教えられています。この操縦士は、おそらく特に信仰心が厚いわけでもない普通の人だったと思いますが、本当にそのようにしたのです。交信記録にそれが残っていると、おかしな言い方ですが「あ、本当なんだな」と、ここまで染み込んでいるんだなと感じました。

このことに端的に表れていますが、東南アジアの場合、本当に一般の人たちの生活の体制としてイスラムが染み込んでいる、ということが現地の生活を認識するうえで重要なのではないかと思います。これまでの朝食会のお話で、宗教としてのイスラム、思想としてのイスラム、文明としてのイスラム、ということ講師の方々が話をされました。それについてはその通りで、さらに加えて私はインドネシアでの生活の体験から、生活体制としてのイスラムというものの重要性を強調させていただきたいと思います。

## 生活体制の中に存在するイスラム

まず、人間生活のいちばん大きな枠組みとなる暦、一年間の時間の分け方ですが、イスラムでは太陽暦と太陰暦を併用しています。日常生活、家族生活、社会生活という点では太陰暦が非常に大事です。特に1年に1度の断食月で、これは生活のリズムが全部変わってしまいます。断食といっても完全に飲み食いをしないわけではなく、昼間、日の出から日没までの間に飲食を控えます。ですからその期間は昼と夜が逆転して、みな日没後ににぎやかに夜中まで食べます。しかも、集団で礼拝しますので、この断食月というのは実は大変にぎやかで楽しいものなのです。さらに、お互い家庭同士、親戚同士で訪問しあったり、礼拝を家族単位だけでなく、近隣同士や職場単位で行うということもあります。非常に親密の度が増す、そういう月です。

それから、曜日では金曜日の礼拝が大事です。金曜日の昼の集団礼拝の重要性は、おそらくジャカルタとか、クアラルンプールとか、そういう大都会でしばらく滞在された方はご存じだと思います。金曜日の昼になりますと、モスクの近くの交通は止まってしまいます。びっしりと車が来て、人が集まります。もう、どうにも動かなくなります。金曜日の昼の礼拝がどれほど重要なものかは、交通の流れひとつで分かります。

そんなことを含めまして、生活の枠組みである暦、曜日、一日の時刻、そんなものがイスラムという枠で作られています。それから、個人の生涯もそうであり、生誕、割礼、結婚、死という個人の生涯にもイスラムの枠が大きく働いております。また町や村など、スペースの使い方でモスクが中心になっており、いわば都市計画のコアになる部分にイスラムが入っています。

それから毎日5回の礼拝をしますが、普通はお昼と午後の礼拝は勤め先や学校で行うことになり、会社や工場、学校などには必ず礼拝所が設けられているというように、建物のプランの

中にもイスラムが入っています。

このように、生活の体制の中にイスラムが入り込んでいるということが非常に重要だと思えます。イスラムを意識しなくても空気のように枠組みとして存在しているのです。思想として文化として意識的に表面に出てくることはありますが、枠組みがあつて、それが働いているから自然に「イスラム」の部分が出てくるのではないかと解釈しています。

## イスラムの社会規範であるイスラム法

イスラムの場合はそのように生活の枠組みになっていると同時に、何をすべきか、何をしてはいけないということが明確にコーランに書かれています。また、コーランの解釈からさまざまな社会規範ができており、それが総体的にイスラム法と呼ばれています。イスラム法が端的に個人の生活に現れてくるのが、結婚、離婚、相続などの身分法（パーソナル・ステータス・ロー）という領域です。おもしろいことにこの領域で係争問題が出た場合、すぐに裁判所に行くわけではありません。ウラマーというイスラム知識人のところにまず相談に行くわけです。

これまでのお話にも出てきましたが、ウラマーはコーランについてよく知っており、日常生活に合わせて解釈できる人です。冒頭にお話しましたが、私が親しく教を乞うた老人というのがそのウラマーでした。普段は商店主ですが、暇な時に町の人々の相談にのっていました。そんな形でイスラムは、国家や宗教組織の媒介を経ないで民衆に触れていくことのできる宗教です。したがって上部構造がどのように変わっても、オランダ時代であれ、日本時代であれ、独立共和国であれ、イスラムはウラマーと民衆がある限り、そしてコアにコーランがある限り、脈々と生きていくわけです。それがいわば下部構造で、上がどんな政治形態でどんな国家形態になるかは状況によって違うということなのです。

## 地方文化へ浸透するイスラム

イスラムがこのように浸透している中で、神に帰依せよとか、社会的な善をなせ、などといったイスラムの普遍的なさまざまな教えが、大変スムーズに地方の文化と融合しています。あまりに見事に融合しているために、どれがイスラムでどれが地方文化なのか分からなくなることさえあります。特に言葉は、どんどん現地の言葉に置き換えられるため、分からなくなってしまう。たとえば、イスラム法の流派にシャフィイー派というものがありますが、これはイスラムの中でも最も穏健でアコモダティブな流派で、シャフィイーという有名な学者の名前をとったものです。これは東南アジアで主流になっているものですが、アラビア語の「シャフィイー」がジャワ語になると「ソピンギー」になります。私がインドネシアで住んでいた家の近くに「ソピンギー」という集落がありました。私はそれはジャワ語だと思っていましたが、元は「シャフィイー」だったのです。ここにシャフィイーの教をたれるウラマーが住んでいたのもその名前が付いたわけです。また、助手に使っていた学生の名前がジャワ後で「アスガリ」と言いましたが、これもアラビア語の「アシュアリ」という有名な法学者の名前にあやかって付けたものでした。このように音が変わるためにイスラムが表面には見えないことがあります。

地方文化への浸透については他にもいろいろあります。これまでのお話の中に「スーフイズム」が出てきましたが、スーフイズムは人間個人と神との対面、神との合一、神の中に自我が昇華する解脱の境地を体験する業ですが、いちばん簡単な業としては「アラー」という言葉を繰り返すというものがあります。なぜ繰り返すかという、それによって雑念を振り払い、アラーに対する帰依だけに精神を集中するためです。これは個人でやってもいいのですが、集団でやることが多いです。集団の場合、一緒に体が動いてまいります。この体の動きとリズムが舞踊の基本になっています。

座ったままで集団が体をきれいに回していくというものでもあり、アチェというスマトラの北端の地方での舞踊がそれです。このように民俗芸能の中にまでイスラムが入っています。また民間治療、「癒し」ということも宗教とは切り離せなくなっております。このように多面的に、しかも地方色豊かに浸透しています。それがいわば大きな基礎になり、現代のイスラムができていけると言えると思います。

## 植民地からスタートした近代とイスラム

やがてイスラムは近代と直面していくわけですが、東南アジアの場合は欧米の植民地という状況からの出発でした。マレーシアはイギリス、インドネシアはオランダ、フィリピンはスペインさらにアメリカに統治されました。19世紀までに地方にあったイスラムの王国はどんどんつぶされて、欧米の支配者が君臨することになったわけですが、ある意味ではつぶされたことがおもしろい結果を生みました。特におもしろいのはインドネシアです。地方のスルタンは抵抗するごとにつぶされていき、いまでも残っているのはジョクジャカルタのスルタンだけです。それに対してマレーシアの場合にはまだ9つのスルタンが残っていて、ここから国王を選ぶことになっています。ブルネイはご存じのようにイスラムのスルタンの国家です。そういったスルタンが東南アジア全体で100以上あったわけです。それが植民地化でほとんどつぶされたことで上が排除され、民衆とウラマーが残りました。先ほど申しましたボランティアワークは、皮肉なことにそういう状況になったからこそ出てきたのではないかと思います。

## 近代主義に対するイスラムの2つの対応

欧米の支配者がもたらした近代主義にイスラムがどう対応するかで、意見が大きく分かれました。ひとつはウラマーを中心とした、欧米のキリスト教支配者には一切協力しないという頑なな伝統主

義者です。これは非常に徹底しておりまして、まず洋服を着ない、靴も履かない、時計をしない、自動車や自動車に乗らないなどというもので、なるべく都会から離れて田舎で宗教塾を開き、そこで伝統的な宗教教育をしていくというグループです。もうひとつは、元をたせばヨーロッパの近代はイスラムが生み出したものであるから、近代を現実として受け止め、我々こそ近代の本来元であるとして、近代を正面に置くというグループです。後者の人々が行ったいちばん大きなことは学校建設です。学校教育のカリキュラムのセキュラーの部分はオランダのものを受け入れ、それプラス、コーラン教育という形をとりました。1910年代から、都会でこういった近代教育プラス宗教教育という学校を自主的にどんどん作りました。片や伝統主義、片や近代主義という形で、下からイスラム社会教育運動が起こってきました。マレーシアの場合はちょっと状況が違いますが、基本的な流れは同じです。マレーシアではスルタンが続き、民衆の自発的な組織を許しませんでした。そんな中、何人かのスルタンが自ら近代化教育を行ったわけです。

インドネシアでは伝統主義、近代主義ともに20世紀の前半に大きな組織体ができ上がります。伝統主義の方では1926年にナフダトゥール・ウラマー (NU) という組織ができ、近代主義の方では1912年にムハマディヤーという組織ができました。NUは現在支持者が数千万人です。農村で塾をやっております、塾の数が6000箇所程度、塾生が100万人以上います。それプラス中間的なマドゥラサという学校があり、宗教教育はインドネシアの現在の国民教育にはなくてはならない部分になっています。一方ムハマディヤーの場合は、近代的な組織なので全ての会員を登録して通し番号を付けていますが、現在の会員は約60数万人です。会員はその程度ですが学校の数が大変多く、幼稚園から大学まで1万以上というインドネシア最大の私学のネットワークになっています。

## イスラムが支えたインドネシアの独立

いちばん重要なことは、このような大衆に基礎を持ったイスラム運動はインドネシアの場合もマレーシアの場合も、独立を要求する民族主義運動および独立が達成された後の近代国家建設に積極的に協力したことです。自らその一員として参加していくという方向性をとりました。そういう状況になったのは、独立運動のプロセスの中で大きな宗教組織が政治指導者と共に下から支えるという共同作業をしてきたことが、大きなバックグラウンドになっていると思います。インドネシアの場合は1945年8月15日、日本が無条件降伏をして、インドネシアに約束していた独立を達成せずに敗退したわけですが、その2日後の8月17日にインドネシアの指導者たちが自ら独立宣言をしました。スカルノ、ハッタという両指導者を先頭にして、対オランダの独立闘争に入ります。実はこの独立闘争を支える人々が民衆の中にいたわけで、血みどろの独立闘争を経て、4年後の1949年に独立を達成しました。この時のコアになったのが日本支配時代に訓練された郷土防衛義勇軍（ペタ）の人々です。日本政府は、現地の人々を武装化するという大胆な政策で連合軍への対抗兵力を増強しようとしたわけです。実はこの郷土防衛義勇軍の旗がおもしろいのです。イスラムの色である緑の地に、赤い太陽ときれいな金色の半月を描いたものです。先に申し上げたようにイスラムは大陰暦を採用しており、月の動きがイスラムの世界観の中心になっております。つまりイスラムの理念が旗の中に入っているわけです。その旗が独立の出発点なのです。

独立戦争の中でのイスラムの役割はめざましいものがあります。ウラマーたちも協力して、出陣する兵士たちはイスラム式の出陣の礼拝をしました。ウラマーはあなた方がこの戦闘で死ぬようなことがあれば、殉教者として天国に行くことが約束されるなどと説教して兵士を激励しました。「アッラー・アクバル」と叫んで、兵士たちは死

んでいきました。独立闘争の不可欠な要素としてイスラムがあったわけです。これが独立後の国づくりの根幹にイスラムが入ってきた歴史的背景です。ただここで、非常におもしろいことが起きました。そのようなイスラムのイニシアティブがあったにもかかわらず、国家建設の根本のところでは自己主張を通しませんでした。その結果、インドネシア国民の88パーセントがイスラム教徒でありながら、イスラムは国教ではありません。インドネシア憲法は5原則を土台にしていますが、その第1条は「唯一神への帰依」であり「イスラムのアラーへの帰依」ではないのです。つまり神への信仰という点で、国民は全て同列に立とうということです。他の宗教も尊重する「多元主義」を国家の原則として確立しました。独立闘争の中で他の宗教の教徒と協力して独立を達成するということをしたので、そこで作られた大前提と言っていると思います。

もし中東との区別をするとすれば、東南アジアの場合には、この宗教的多元主義が根幹にあるということです。付け加えますと、マレーシアの場合は憲法にイスラムが国教として入っていますが、これはスルタンが統治者として君臨するという体制の下で国家が作られたことによります。そうかといって宗教の自由がないわけではありません。宗教の自由は憲法にうたわれています。イスラムを国教として定めてはいるが他の宗教も認めるという多元主義が、マレーシアでも見られるわけです。植民地時代の抵抗をふまえて、こういう国作りをしたということが、宗教的な調和を生み出したバックグラウンドになっていると思います。

東南アジアではこういった歴史的背景を持ち現代に至っているわけですが、まず国家づくりの上での宗教的多元主義と社会生活の上での近代化があります。それに加えて現在の大きな柱は、経済開発を受け入れ積極的にそれを進めるという方向性です。イスラムでは個人が富を蓄えて、個人

の能力に従って豊かな経済生活を行うことは是とされています。ただし一方で、利己的であってはならない、貧しい者、苦しんでいる者への同情と支援を惜しんではならないことを強調しており、それがザカートという形で制度化されております。このようにイスラムは根本的なところで資本主義的な経済に親和性を持っているため、経済開発にどんどん力を注いでいきました。また近代化の推進役として、イスラムの指導者たち自らが立っていきました。そんな中でインドネシア、マレーシア、また他の東南アジアの国々でも、新しいタイプの指導者が出てきました。経済生活の向上、教育の普及、高等教育の発達などが相まって、都市の裕福な中間層が増えています。ジャカルタやクアラルンプールのオフィス街やショッピングセンターは、日本と同様の豊かさを持っています。そのような新しい社会開発の成功をバックにして、ライフスタイル自体が大きく変わっています。

## イスラムの主流化と新たな指導者像

ここに「アマナ」というインドネシアの雑誌がありますが、これは教育を受けた都市の中間層の婦人雑誌です。日本で言えば「婦人公論」あるいは「婦人画報」のようなものでしょうか。グラフィカルな部分も多い雑誌です。表紙の写真のように、頭の髪を覆うというイスラム女性としてのモデスティはありますが、表情といい大変モダンな感じです。中にはファッション、料理、子供の教育などの記事があり、都会の若い女性や母親が関心を持つような内容です。いまの東南アジアのイスラム中間層はこんな雰囲気なのです。実はこの雑誌の編集長は、ジャカルタの中央広場にある国立独立記念モスクの礼拝指導者をやっていた方で、引退してからこの雑誌を始めたのです。いわばインドネシアのイスラムの主流を代表する雑誌です。こういった大きな、都市の中間層を中心としたイスラムの主流化の動きが起こりまして、イスラム復興はそれをベースに展開していると言え

ます。このような動きを代表する個人の名前を資料に挙げておきました。

B.J.ハビビという人は、インドネシアで最先端の科学技術開発を行っている技術研究担当国務大臣ですが、彼はムスリム知識人協会の会長です。ヌルホリス・マジドという人はシカゴ大学でファズルル・ラフマンというネオ・モダニズムの思想の教授の教えを受けました。彼は「イスラムを政治に持ち込むな。イスラムは政党ではなく社会倫理として展開しよう」ということで思想運動を起こしました。

アブドルラフマン・ワヒドという人はNUの現在の会長です。彼は最も熱心な宗教的多元主義の擁護者です。キリスト教徒、仏教徒、ヒンズー教徒と一緒に宗教の自由、特にマイノリティの権利を守ろうという姿勢を明確に示しています。彼はバグダッドやカイロに留学するなど海外経験も豊富で、英語で見事な演説をする人ですが、単に西洋かぶれの近代主義で多元主義を言っているわけではありません。イスラムの中に、人間にはさまざまな考え方があるということが自然法としてある。イスラムの場合自然法イコール神の法、神の習慣なのですが、複数の宗教の存在はあたりまえのことだから、排他的になるなという主張をしています。次のムナウシル・シャザリという人ですが、彼は宗教大臣でした。彼は宗教大臣の時代に大変大胆なことを言いました。「我々は現代に生きているのだから、コーランの字句にとらわれる必要はない。ムハマドの時代に下されたコーランの精神や原理は受け止めるが、それを字句通りに現代生活に適用することは必要ない」ということです。具体的に何を問題にしたかということ、イスラムの相続法はコーランの字句では親の財産を子供が相続する際、女が1に対して男が2なんです。「この相続区分はおかしい。現代では通用しない、現代社会では男女平等に分割するべきだ」と言い出し、大議論を巻き起こしています。言い出したのが宗教大臣ということで、異端だとすぐ

には片づけられずに現在も真剣に議論がかわされております。

また、フィリピン、タイ、ビルマなど東南アジアの他の地域にも、イスラム教徒は各々数百万単位で存在します。この中にも宗教的多元主義でいこう、調和主義でいこうという動きが明確に出て来ています。ごく最近タイの内閣が代わって民主党を中心とした新内閣が成立しました。この外務大臣のスリン・ピツワンという人はイスラム教徒です。南部ムスリム地域から選出されて民主党の幹部として活躍していますが、仏教徒に混じって活動しているということで分かるように、政治的にはイスラムを持ち込まない、タイの国民国家としての統一を守るという立場で活躍しています。ハーバード大学の人類学の博士号を持っており、学者から政治家に転向した人です。このように「forward looking」前向きで、「innovative」革新的で、かつ「open minded」心の広いという、新しい東南アジアのイスラムの動きを代表する人々が社会の前面に出ております。

何よりもおもしろいことは、現在このような新しいタイプの指導者が、それまでのひと世代前の時代にあった中東のイスラムに対する劣等感を投げ捨て、それから解放されて、東南アジアのイスラムが中東とは違うというだけでなく、イスラムの本来の姿、イスラムの核心を現代において実現するとすれば、「我々のほうが本物なんだぞ」

と言い出していることです。経済生活の向上、社会的な調和、宗教的な多元主義、そういう新しいイスラム教徒の社会づくりという点で、我々のやっている実験のほうが実は本物なんだぞ、という自己主張を始めております。

このような動きに押されて、インドネシアのスハルト大統領もイスラム教徒としての姿をあらわにしております。先頃、スハルト大統領の鶴の一声で、ここにあります「ストゥディア・イスラミカ」という新しい雑誌が出ました。これはジャカルタの国立イスラム大学から出された雑誌なのですが、インドネシア語とアラビア語と英語の3カ国語で、新しい学術研究の論文を掲載しております。この大学は研究者・学者・大学人を通して、新しい東南アジアのイスラムの方向性を世界に発言するという発信基地になりつつあります。おそらく今後10年20年で、イスラム世界の比重がこのような新しい指導者の力で大きく変わってくるのではないかと思います。イスラムと聞くと我々はすぐに、エジプト、過激派、テロを連想するのですが、そうではなくて東南アジアの「accommodative」、調和的なイスラムというものが実際の社会的な成功を伴ってだんだんと力を持つてくるのではないか、姿を現してくるのではないかと思います。長くなりましたが、これで私の話を終わらせていただきます。どうぞ、コメント、質問等いただきたいと思っております。

## 第2部 質疑応答

**池田** どうもありがとうございます。誠に啓発に富むお話で、おもしろく聞かせていただきました。いくつかエピソードが出てきた中で、それに対してどこか何となくなじみのあるような印象をもちました。飛行機のパイロットの最期の話などは、昔「天皇陛下万歳」と言って敵機に突っ込んでいったということに通ずるものがありますし、あるいはアラーの名前を唱えてスフィズムの踊りになっていくというのは、我々の歴史の中でも念仏踊りというようなことがあるわけです。また植民地主義時代にスルタンが全部つぶされて民衆とウラマーのイスラムになっていく、インドネシア的イスラムになっていくというお話は、どこか公職追放の後の日本の会社主義といったものを連想させます。もちろんその類比というかアナロジーが正しいというわけではないのですが、何となく追体験ができるような原体験を我々はもっているのではないのでしょうか。非常に親しみやすいお話だと思いました。

いまのお話をお聞きした印象に基づいた質問なのですが、ひとつは東南アジアのイスラムは、政府や社会的な指導者によってうまく管理されたイスラムなのではないかということです。それが中東のイスラムと若干違う点ではないかという気がします。もうひとつは、「アジアの虎」とか「アジアの虎の子」などと言われているような東南アジアの経済発展というものは、これまではそこは儒教圏だからと言われきたわけですが、それに加えてイスラムのネットワークの介在が注目できるのではないかとも思っています。

もしそうだとすれば、東南アジアにはふたつのネットワークがあるわけです。ひとつは華僑のネットワーク、もうひとつはイスラムのネットワークです。これから東南アジアが外に出ていく場合に、そのネットワークが向く方向はどちらなので

しょうか。一方は、どうやら中央アジアや中東などに向き、他方は中国を向くのではないのでしょうか。そう考えた時に、そこでベクトルの分裂といったことが起こる可能性があるのかどうかという問題です。

それからいまの経済開発の問題と結びつくわけですが、開発が進むと当然ながら階層なり階級の分化というものが起こるわけです。そこで、いままで比較的まとまっていた階層の中で分化が起こって、おきざりにされる人たちが出てきます。開発が進めば進むほどそこから遅れる人たちが出てくるわけであって、中東などの事例を見ていると、やはりイスラム原理主義というようなものがつこんでいくすぎがそこにあるわけです。それと同じような現象が、開発が進んでいる分だけ東南アジアにも出てくるのではないかという懸念を持っているのですが、その辺りについてどのようにお考えなのかをまず最初にお聞きしたいと思います。

**中村** 最初の、うまく政府や社会指導者が管理をしているのではないかということですが、私はその通りだと思います。ただ、政府の指導者にせよ、社会的指導者にせよ、実はその間の距離がそんなに遠くないのです。先ほどお話しましたように、独立戦争の時には戦友として戦ってきた仲間たちというのが非常に多いわけです。というわけで、個人的なつきあいというのが強くあります。イスラム教徒はご存じのように、神の前には社会的地位とか富ということは無視して平等です。ですからモスクに入って礼拝する時には、大統領であれ、副大統領であれ、軍司令官であれ、隣同士に座って一緒に礼拝できるのです。そういう意味でモスクは暗殺の危険な場でもあるのですが、本当に身に寸鉄も帯びずにひとりのイスラム教徒として平等にモスクの中で礼拝するわけです。そういった

構造がございまして、それが徹底しています。それはサウジアラビアでもそうなのですが、金曜礼拝が終わった後、モスクでは一般民衆が国王に対して直訴ができるのです。それを彼らはイスラム式の民主主義だと言っていますが、礼拝が終わった後に国王を囲んでいろんな文句を言ったり陳情したりできるのです。ブルネイでもそうです。ボルネオ国王を民衆がもみくちゃにする形でいろんなことを言っています。そういう姿に端的に表されますように、話し合い、インドネシア語でムシャワラと申しますが、ムシャワラでもって処理していくということがございます。

それから、現在の言葉で言えば「ソーシャルエンジニアリング」ということになるのですが、こんな話がございまして。先ほどアブドルラフマン・ワヒドというNUの会長の話をしました。彼は伝統主義のほうの組織の長ですが、実は1983～84年のイスラム復興の途上で、インドネシアでも過激派的な動きがちょっとあつて、血なまぐさい流血が、タンジュンプリオクというジャカルタの港湾労働者が集中している港町で起こりました。それは、池田先生がおっしゃいました「開発のおちこぼれ」ということに非常に関係していたのです。当事ベニムルダニという人物が国軍の最高司令官だったのですが、その最高司令官とアブドルラフマン・ワヒドと一緒に軍のオペレーションルームに入って、地方の情報機関から入ってくる情報を全部集約し、どこの情勢がどうだ、どこが危ないからそこに人をすぐ送ろうということ、一緒になだめに行ったことがあつたそうです。私はアブドルラフマン・ワヒド本人からこの話を聞いたのですが、そのようなことをしているのです。このように、国家指導者とイスラム指導者とは距離が遠くないのです。しかも宗教指導者は妥協したり身を売ったりするような感じではなく、文句をつける時には断固として文句をつけるという宗教指導者としての権威を持ちながら、対政府の交渉をしております。

それから2番目の、華僑のネットワークとイスラムのネットワークが東南アジアでどんな関係を結ぶかということですが、これは開発の進展に伴った非常におもしろい問題です。これについて私の大きな見通しは、両方ともうまくやっていくのではないかと、共生するという方向を両方とも最終的にはとるのではないかと、いま意識的にそれを行っているのではないかと考えています。

ただし、多少のギクシャクはあります。昨年の暮れから今年の始めにかけて、インドネシアの地方の都市で随分暴動がありまして、その暴動の対象となったのは、地方の華僑の商店でした。華僑が持っている商店と華僑系のキリスト教の教会が焼き討ちにあつたのです。ところがそれをよく見るといくつかの特徴的なパターンがありまして、そのうちのひとつは、地方都市、規模からいくと人口10万から20万人くらいの中小都市で、そこに華僑系のスーパーマーケット、ショッピングモールが進出するという、そういう状況になつたところが、ほとんど必ず暴動の対象となりました。つまり、華僑系の資本が入って地元の中小の商店がつぶされていく、競争に負けていくという構図のところで、反華僑としてイスラムの旗のもとにこの華僑をやっつけるという暴動が起こつたのです。それについても、政府と宗教指導者は上から一生懸命に沈静する作業をしました。しかしたしかに、そういう対立の構図があります。

それと同時に、先ほどのアブドルラフマン・ワヒドは非常におもしろい実験をしたのですが、それは華僑の資本や経営能力をイスラム教徒も学ぼうということでした。イスラム銀行というのがイスラム圏で始まっていますが、そのイスラム銀行の資本の提供と指導を華僑の銀行マンに頼むという提携をして、イスラム銀行プラス華僑資本という、非常におもしろい合弁の企業をインドネシアで始めました。この銀行は、その後まだ紆余曲折があり、まだちゃんとファンクションしていないようです。身近な細かなケースではそのようなこ



とがあります。

他方、思想運動としては、マレーシアのマハティール首相とアンワール副首相とが、対儒教との協力を非常に大胆に打ち出しています。ここ数年來マレーシア政府は、例のハンチントン教授の「文明の衝突論」の挑戦を受けて立ちまして、文明観の対話ということを出した国際シンポジウムをやっています。その国際シンポジウムの最初のタイトルが「儒教とイスラムの共生」というもので、2年前にクアラルンプールで行われました。儒教の社会倫理とイスラムの目指す社会的な調和は、根本のところ共通するところがあるんだということを強調した国際会議でした。そこで、アンワール・イブラヒムは中国語で演説を行い、これらのポイントを中国語で説いたのです。それは華僑系の人々に大きな感銘を与えました。これらの動きに表されますように、マレーシアのムスリム指導者たちは華僑の経済力や経営能力、市場に対するコントロール力を生かしながら、イスラム教徒であるマレー人の生活も向上していこうという戦略をとっています。

また、池田先生がご指摘になったように、国際的な面ではたしかに棲み分けをしています。中国市場は華僑が、中央アジアやアフリカはイスラムが、というようにその棲み分けは見事です。特に中央アジアの旧ソ連圏のイスラム教徒が多数派の国々は、マレーシア、インドネシアからの資本提供、技術協力などの進出が非常に活発に行われています。日本政府はこれを応援しているようで、この援助はひとつのパターンとして、マレーシア、インドネシアからアフリカ、中央アジアへの進出をサポートしています。いわゆる南々援助です。おそらくその方向性が今後とも続いていくのではないのでしょうか。

元インドネシアの駐日大使に有名なサイディマン将軍という方がおられますが、サイディマン将軍は引退してから、水戸黄門のような形でいろんなところを回っています。特に彼はアフリカ広域

の大使としてスハルトのサポートをしながら、アフリカのあちこちを飛び回っています。特に、援助・開発の面でインドシアの経験を移転するという作業に携わっています。そんな方向で展開するのではないのでしょうか。

**池田** 若干時間がありますので、ご質問をお受けしたいと思います。

**歌川** 日本財団の歌川でございます。最初に一言感想を申し上げます。中村先生のお話を最後にお聞きしてから27、28年たちますが、先生はなかなかすばらしい論者で、その時はマルクス主義についてすばらしいお話をされました。本日お話をうかがって、ますます円熟されてかつ普遍性をもたれて、「えらいもんだなあ中村光男さんは」と思った次第です。

最後に触れられましたが、東南アジアにおけるブルラリズム、あるいは原理主義的ではない、(原理主義というとな難しいのですが、)いわゆる過激ではない、昔がいちばんよかったとは言わない、そういうアジアのイスラムの話があって、そこで本家のアラブのメッカのあるところ、そういうものに対する劣等感が払拭されているということでした。たしかにそうなのではないかと思うのですが、一方でご本家さまのほうにもいろいろな派がありますが、こういう東南アジアのイスラム教についてどういった評価をもっているのでしょうか。特に、最初に出てきた5つの特徴の中から、「contextual」な観点では、ご本家さまはどんな評価をもっているのでしょうか。それからムハマドの頃はまったくすべて適用されないということですが、いまでもそれを金科玉条としていると論理的には昔がいちばんよかったということになってしまうのですが、それをしているとご本家さまのイスラムのほうはどうなってしまうかについて、先生のご自身のご評価をおうかがいしたいと思います。

**中村** 私の昔のことが出てまいりまして、忸怩たるものがございます。ご質問のむきですが、アラ

ビアの本家のほうがどんなふうに東南アジアの発展を見ているかということなのですが、実はサウジアラビア、特にアラビア半島のイエメン、あるいはハドラマウト地域と東南アジアとのつながりは非常に古くからございます。最初、イスラム伝来期には、アラビアのムハマドの家系を引く人たちは、東南アジアの王族たちの権威に対する付加価値になるということで、ずいぶんたくさん王女のお婿さんになってもらったのです。ところが、19世紀あたりから入ってきたハドラマウト地方の人たちは商人が多くて、これが実は本場でのイスラム改革運動の思想を東南アジアに伝えた人になっています。全体的にこのグループは本場の保守主義に対しては非常に反発しています。ですから、東南アジアにおけるアラビア人というのは、おそらく大半は改革派、近代派のほうではないでしょうか。

今後どうなるかという問題なのですが、数日前の日経新聞が非常におもしろい記事を書いていました。サウジアラビアがだんだんと普通の国になりつつあるというんですね。イスラムの本家、メッカとメディナをかかえた、ムハマドの時代そのものを維持することを建前としてやってきた一方で、です。第一に人口の増加です。ものすごい勢いで人口が増加してきました。これは生活が改善されてきたことによるものです。そして、アラビア人の失業者の増大が見られます。教育の普及と失業者の増大で、どうしてもサウジアラビア自体が近代化ということを経済的な規模で、大きなスケールでしなくてはいけない状況に入ってきたのです。それで、どうなっていくのか。私はサウジアラビアに行ったことがないのではっきりとしたことが言えないのですが、1993年にハーバード大学の中東地域研究所というところに客員研究員で行ってございまして、その時に大変おもしろい体験をいたしました。

サウジアラビアの元石油相でヤマニという人がおりますが、彼がハーバード大学のロースクール

に抛金をいたしまして、イスラム法の講座を作ったのです。そして、そのイスラム法は実は古代イスラムではなくて、現代イスラム法なのです。つまり国際社会でビジネスをする、人が移動する、そういった新しい状況の中でイスラム法はどうあるべきかということについて研究してほしいということで、ボンと金を出したわけです。それで、彼自身が客員教授で年に2回ほどハーバードに来て来て講義をしたのですが、丁度その時に話を聞く機会を得ました。

すると彼は先ほど申し上げたようなインドネシアの、あの「innovative」な雰囲気を持っているのです。つまり、サウジアラビア内部から復古主義を変えていこうとしているのです。ご存じのように彼は王に属する家系ではなく庶民の出で、実は東南アジアの血も、カリマンタンの豪族の血も入っております。彼はいま、サウジアラビア内部から近代化、特に民主化、議会制民主主義に近い形で国民の政治参加ができるような、そんな方向性を模索しているひとりです。そんな動きが、いまサウジで出ているわけです。ですから私の感じでは、いま東南アジアのイスラムで起こっているような動きは、遅かれ早かれ本場のほうにもインパクトを与えるのではないかと、特に先ほど申しました中央アジア、アフリカ、ナイジェリアなどの多宗教の国では、むしろ新しい国づくりにはマレーシア、インドネシアのほうがモデルになっているのではないかと思います。単に技術援助、資本の導入ということだけではなくて、イスラム政治のほうもマレーシア、インドネシアをモデルにする方向が出ているようです。従って、10年くらいたったら様変わりしてくるのではないかと、東南アジアのイスラムの比重というものが、イスラム世界で非常に大きくなっていくのではないかと考えています。

**渡辺** 日本興業銀行の渡辺です。つい最近マレーシアでマハティールが演説の中で、聴衆にチャド

ルを着用した女性が非常に増えてきたことに対して、それを好まないという発言をしたそうです。そして隣にひげをはやしたアンワールがおりまして、これはイスラムの象徴みたいなものですが、マハティールはそのひげをつかんで、「これがいかなのだ」ということを言ったそうです。その場にあわせた松永大使から、後日その話を聞いたのですが、ということは、このごろは逆に古いイスラム的なものへの復帰、そういう風潮がかなり強まってきているのではないかと感じます。その点はいかがでしょうか。それとも新しいイスラムの建設に向かって、ずっと進んでいくのでしょうか。

**中村** 服装の問題、それから身体的な表現についてですが、いちばん根本にあるは、伝統的なイスラム、特に農村をベースにしていた伝統的なイスラムが新しい都市化、あるいは教育の普及ということで近代化が進んで、昔の伝統的共同体的なしからみから離れて、個人個人が新しい状況に直面しなければならなくなったということだと思います。都会に出てくる、あるいは就職をする状況になってきて、個人の選択としてどうするかという実存的な問題が出てきた中で、イスラム教徒としてのアイデンティティの表現の、いわばいちばん簡便な方法として、ひげをはやすとか、あるいはチャドルをかぶるという形で出てきているのではないのでしょうか。

それは本当に目に見える形で違ってきています。私が1970年代にインドネシアの大学に初めて行った時といまの学生は雰囲気は本当に違います。女の子はインドネシアでも大半がチャドルを

かぶっています。そこでいまの松永大使のお話にありましたように、それをどう受け止めるかでいろいろと議論されているわけです。そのお話のいちばんおもしろいところは、後継者として内外に認められているマハティールとアンワールが公衆の面前でなかばジョーキングなんですけど、けんかするという場面です。実はこれはイスラムの根本にある個人主義なのです。いったい誰が真理を決めるかということ、人間には決められないわけです。最終的には神の判断の問題なのだから、どういう形でとるにせよいちばん大切なのは敬神、神を敬う心が表れていればよいということです。私の知っているムハマディヤーの指導者のひとは、絶対にあのピチというトルコ風の帽子をかぶりません。「こんなことでよいイスラム教徒であるかなんかの区別はつかない、問題は心の問題だ。俺はそういう外部的な表面的な偽善に抵抗するためにぜったいにかぶらない」、そう言っただけでかぶらないのです。そういう人もいます。そんな人が最高指導者のひとりとして許されるという幅の広さ、このおもしろさがイスラムにはあるのではないのでしょうか。ここにはやはりキリスト教、特にカトリックの場合の教会組織の強さなどからは類推できない個人の強さがあります。

**池田** 真理は決められないにしても、終わりの時間は決まっているわけで、誠に残念なのですがこの辺で終わらせていただきます。今日は非常におもしろい話をうかがえて啓発されたと思います。どうぞ、もう一度拍手をいただければと思います。ありがとうございました。

## 付 録 (中村教授講演レジメ)

### 「東南アジアとイスラム」資料

#### ①はじめに

私とイスラム：少年期＝キリスト教、青年期＝マルクス主義、イスラム＝最も遠い存在。

イスラムとの出会い：1970年代のインドネシアの片田舎、青年たち、ある老人の死。

民族主義・開発主義に覆い尽くされない普遍主義＝生きているコーランとハディース。

ムハマディヤ運動研究（博士論文）、ムスリム共同体の自助努力＝学校、診療所、病院の建設、経営。

東南アジアのイスラム全般への関心＝近代とイスラムの両立、近代を越えるもの。

#### ②東南アジア・イスラムの一般的イメージ

「東南アジアにもイスラムがあるの」——旅行者の無知と驚き。

「中東本場のイスラムに比べて、いい加減、表面だけ、名目上、折衷的」——長期滞在者の知ったかぶり・ムスリム自身の謙遜で拍車。

「生態史論」：「荒涼とした砂漠の遊牧民の純粋な戒律中心の一神教は高温多湿、緑豊かな東南アジア熱帯雨林では変質し、神秘教・聖人崇拜中心、先行・土着信仰と習合した」——西欧学者の「定説」。

#### ③東南アジア・イスラム文明の歴史の深さ、浸透範囲の広さ

生きている宗教：遺跡、遺物、観光スポットでは見えない。「アラー・アクバル」の叫び。

生活体制：暦（大陰暦）、曜日（金曜）、時刻（礼拝）、祝祭日（断食月・断食明け大祭、巡礼・犠牲祭）、通過儀礼（誕生、割礼、結婚、死）、都市計画、官庁・工場、住居建設プラン。

政治文化：権力（ダウラ）、正義（アデイル）、代議制（ワキル）、協議制（ムシャワラ）。

社会規範：シャリーア（イスラム法）、礼拝から国家、国際関係まで。身分法（婚姻、離婚、相続）の重要性。勧善懲悪、ウラマー・イスラム知識人の役割。

芸能、芸術、文学：地方民俗芸能、舞踊・音楽、年代記・伝承文学（マレー語の発達）。

民間治療：医術、薬種、魔術、呪術、護身術。

イスラム世界における位置：ムスリム総人口10億の1/5、東南アジア総人口の2/5。毎年メッカ巡礼中、最大のグループ、20万/200万人。「辺境」から「中心」へ。

近年、「対アラブ劣等意識」からの解放、東南アジア・イスラムの自己主張の開始。

④近代とイスラーム：20世紀初頭から2つの対応——伝統主義と近代主義

近代＝植民地、西欧化——異教徒支配への抵抗、西欧との絶縁、伝統主義。

近代合理主義、科学技術＝受け入れ（本来イスラームが生み出したもの、取捨選択）

一種の「和魂洋才」——日本が手本。

インドネシアの場合：

伝統主義：伝統的イスラーム教育、農村・塾、コーラン朗唱、イスラーム法、神秘主義、ウラマー・師弟関係——ナフダトゥール・ウラマー（NU、1926年創立）。

近代主義：世俗教育プラス宗教教育、都市・学校、コーランの自主的理解、イスラーム倫理、近代的職業に進出——ムハマディヤー（1912年創立）。

両者ともに大衆的基盤（最大のNGO）、政府・与党、軍も一目、二目置く、協力要請。

最近：伝統主義の近代化——農村の変化、家族計画受け入れ、塾の学校化。

近代主義の定着・保守化——改革の政府による実行、宗教教育の普及。

ネオ・モダニズムの出現——イスラーム倫理の社会化、宗教的多元主義、共生思想。

⑤イスラームの主流化と新たな指導者像

政府の開発主義と第3の道の模索：物的・精神的繁栄の両立、都市中間層のライフスタイル（ファッション）、イスラーム復興の主流化、イスラーム世界の主流へ。

(1) B.J.ハビビ＝科学技術の先端性と宗教的倫理規律の相互補完（ムスリム知識人協会）。

(2) ヌルホリス・マジド＝「イスラーム、イエス。イスラーム政党、ノー」、ネオ・モダニズムの思想運動。

(3) アブドルラフマン・ワヒド＝伝統主義の改革、ウンマの自立、宗教的多元主義の擁護。

(4) ムナウィル・ジャザリー＝イスラーム法の現代化、コーラン字義の束縛からの解放。

(5) マハティール・ムハマド＝マレー・ムスリムの地位向上、マレーシア全体の繁栄。

(6) アンワール・イブラヒム＝イスラームの普遍的価値の実現、文明間対話の提唱。

(7) スリン・ピツワン＝タイ民主党新内閣外相、民主化＝マイノリティの権利擁護。

(8) ミスワリ＝フィリピン・ミンダナオ・ムスリム自治地方知事、平和と開発路線。

⑥共生と対話の展望

インドネシア：「建国五原則」の再確認、イスラーム世界のリーダーシップ。

マレーシア：文明間対話のイニシャティヴ。

ともに新たなイスラーム理念の発信基地へ、知的挑戦。

日本の役割への期待。

